

「ことばの教育」パイロット校事業 報告書

学校名	広島県立忠海高等学校
校長名	橋本 隆志
所在地	広島県竹原市忠海末浦四丁目4-1
H P	http://www.tadanoumi-h.hiroshima-c.ed.jp/
学級数	9学級
タイプ	I ・ II

1 研究の概要

(1) 研究主題

「体系的かつ系統的な『ことばの教育』の実践による論理的な思考力と豊かな表現力の育成

(2) 研究のねらい

これまで本校は、「総合的な学習の時間」と教科・科目ならびに学校行事等に関連づけ、体系的な「ことばの教育」の実践をめざしてきた。しかし、高校3年間を通じた系統的な指導が不十分であり、各学年における評価規準も不明確であった。その結果、教職員や生徒自身が常に「ことばの力」を意識して日々の教育活動に取り組んでいるとは言い難く、また、教科学力や小論文の論述力の伸長といった面においても伸び悩んでいる状況に止まっていた。

このような課題のもと、授業をはじめとして、全領域における教育活動と「ことばの教育」との有機的関連性や3年間の系統的指導、さらには、「身に付けさせたい力」（論理的思考力と豊かな表現力）を明らかにすることによって指導の効果を高めていくため、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織・体制

パイロット教員を中心とする教職員研修を開催するとともに、校務運営会議、学年会、教科代表者会議等において、随時連携を図ることによって、全教職員で、また、すべての教育活動において実践を行う。さらに、図1にあるように、生徒に、自分の考えを発表させる場を有機的かつ系統的に設け、論理的な思考力や表現力の育成に努めることによって、生徒の変容過程を探る。

目指す力：自分の考えを、書く・話すという手段で、説得力ある根拠をもとに表現していける力

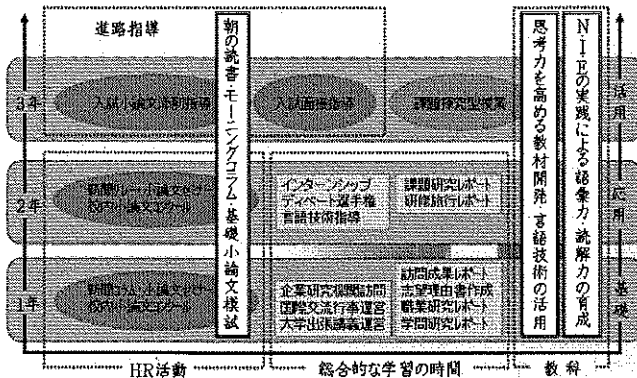


図1 体系的・系統的指導

2 2年間の取組みの概要

(1) 教科

- ① 「論理的思考力や表現力を高めるための言語技術の活用」をテーマとする公開・研究授業の推進。
- ② 読解力・思考力・表現力の向上にとって効果的な教材や資料の開発。
- ③ 「問答ゲーム」のルール（主語入れ、結論先行、ナンバリング、説得力ある根拠）を意識した発問と応答。
- ④ 「なぜ」といった根拠・理由等を問う評価問題の工夫。
- ⑤ 国語科週末課題「社説を読む」の提示・添削指導。

(2) 総合的な学習の時間

- ① 「キャリア教育」ならびに「ことばの教育」を主軸とする教育内容の再構築。
- ② 各種レポートの添削指導ならびにプレゼンテーション技術の指導。
- ③ ブレーンストーミング・KJ法・マインドマップ等を活用した議論や発表方法の指導。
- ④ 校内ディベート選手権の実施に向けた情報活用力や論理的な表現力の育成。
- ⑤ インターンシップ・出張講義等における関係者・講師との適切なコミュニケーションに係る指導。

(3) HR活動・学校行事

- ① 校内小論文コンクールの実施にともなう生徒相互評価。
- ② 「新聞コラム」、「新聞リレー」添削及びコメント入れ。
- ③ HR日誌の有効活用。
- ④ LHR・SHRの有効活用（スピーチ・会の運営等）。
- ⑤ モーニングコラムの改善（論理的な文章等の発掘）。
- ⑥ 配布資料・掲示物等の記述内容の工夫。
- ⑦ 個人面接における会話指導。
- ⑧ 学習成果発表会（前期・後期各1回）の開催にともなうプレゼンテーション指導。
- ⑨ 「『ことばの力』を高める強化月間」の設定（2月）。

(4) 学校生活全般

- ① S（対象）・T（時）・O（状況）・P（場所）を意識した、気持ちを伝え合うあいさつや会話の励行。
- ② 適切な会話（尊敬語・謙譲語・丁寧語等）を意識させる指導。
- ③ 「察し合い」のコミュニケーションではなく、用件の目的・根拠・見通し等を適切に語らせる指導。
- ④ 各種コンクール等、発表機会の有効かつ積極的な活用。

(5) 研修会・講演会

パイロット教員を中心とする、言語技術指導に係る研修及び演習をおこなうとともに、本校OBによる、論理的な思考や豊かなコミュニケーション力をテーマとする講演会を開催。

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ① 「ことばの教育」パイロット校アンケートから
これまで3回にわたる、生徒意識調査結果の推移（表1）から見る限り、コミュニケーションにおける「書く」・「話す」というアウトプット面においては、自分の考えを明確

に伝えようとする意識が高くなっている。これまでの「言語技術」指導等で身に付けた、結論先行型、ナンバリング、ラベリングなどの論理性を意識した技術指導が功を奏していると考えられる。ただし、その根拠や理由だてに苦慮している姿も同時に窺える。

表1 生徒意識調査アンケート結果の推移

パイロット校共通アンケート(意識調査)		いつもしている/たいたしている		
		第1回調査(2006.6)	第2回調査(2006.12)	第3回調査(2008.12)
■授業の中で友だちの考えや意見を聞くとき				
1	相手が一歩言いたいのは何かも、考えながら聞いています	74%	71%	77%
2	根拠や理由を考えながら聞いています	63%	62%	69%
3	互いの意見の違いや共通点に気づけて聞いています	64%	68%	68%
■授業の中で友だちに自分の考えや意見を話すとき				
4	自分が伝えたいことを明確にして話しています	66%	70%	72%
5	根拠や理由を明確にして話しています	51%	56%	56%
6	相手や目的によって組み立てに気をつけて話しています	56%	64%	67%
■授業の中で自分の考えや意見を書くとき				
7	自分が伝えたいことを明確にして書いています	63%	68%	72%
8	根拠や理由を明確にして書いています	54%	63%	63%
9	読み手や目的によって組み立てに気をつけて書いています	52%	61%	66%
■授業以外で本を読んだとき				
10	読んだ文章の組み立てを調べられます	41%	45%	49%
11	読んだ文章の要点をまとめて相手に伝えることができます	44%	49%	52%

②「総合的な学習の時間」生徒自己評価アンケートから

本校の「総合的な学習の時間」は、自らの進路や在り方生き方に関わって、「読む」「聞く」「書く」「発表する」「まとめる」「論議する」といった、まさに「ことば」を駆使した学習活動である。その中で、今年度は、「末期医療において、患者本人の意志があれば、安楽死は認められるべきである」を論題に校内ディベート大会を展開した。また、夏休みの就業体験(インターンシップ)を経て、進路課題研究レポートを作成し、プレゼンテーションをおこなった。

これらの学習を通じた生徒自己評価アンケート(表2)では、少しずつではあるが、年次を追って力の向上が見受けられるとともに、これらの力の重要性が認識できている。

表2 生徒自己評価アンケート結果の推移

■総合的な学習の時間における生徒自己評価		たいへん/ますます	
		平成17年度	平成18年度
ディベートを通じて論理的な思考力が以前より身につきましたか	66%	71%	
ディベートを通じて説得力や議論する力が以前より身につきましたか	65%	71%	
ディベートを通じて論理的な思考力の重要性が実感できましたか	75%	78%	
課題研究レポートでは説得力・表現力豊かな発表ができましたか	67%	72%	
各学習を通じて思考力・表現力のスキルアップの必要性を感じましたか	80%	85%	

③広島県高等学校共通学力テストから

表3 広島県高等学校共通学力テスト(国語)の結果

共通学力テスト		正答率			無回答率
		分量	構成	語句	
平成17年度 共通学力テスト	A問題	94.3%	92.0%	73.6%	4.5%
	B問題	72.7%	73.7%	54.5%	18.2%
平成18年度 共通学力テスト	A問題	97.4%	96.1%	94.8%	2.6%
	B問題	92.8%	89.2%	53.0%	3.6%

これまで、「モーニングコラム」や「新聞コラム」等、論理的な文章を読ませる、書かせる指導を継続的におこなってきた成果の一つとして、表3の広島県共通学力テスト(国

語)の論述問題における正答率の向上ならびに無回答率の減少が顕著である。

④本年度推薦入試結果から

これまで、全校的な「ことばの教育」の推進と同時に、論理的で説得力のある表現力を育成するための個別指導を全教職員で組織的に行ってきた。その成果のひとつに、小論文・面接を中心とした推薦・自己推薦入試の結果がある。表4は過去3年間の国公立大学の推薦・自己推薦入試による合格者及び合計の合格者数の推移である。「志望理由書」「小論文」の論述や「面接」の受け応えにあたっては、「言語技術」指導によって基本的な型を身に付けさせてきたこと、また、国際交流行事やインターンシップ等の学校行事及び課題探究的な学校設定教科・科目の充実によって、生徒自身が、論理的な表現力や自信を持って語れる内容を持ち得ていることが強みとなっている。

表4 国公立大学の合格者数の推移

	平成16年度	平成17年度	平成18年度
推薦	6名(104名中)	7名(114名中)	11名(99名中)
合計	14名(104名中)	12名(114名中)	19名(99名中)

(2) 課題

研究実践の中心であるべき各教科・科目においては、学習指導要領上の教科・科目の目標や特性を反映させた上での、指導方法の具体化ならびに一般化が進んでいるとは言えない。もちろん、意識して発問や教材を工夫し、公開授業にあわせて、「言語技術」を意図的に盛り込んだ授業実践がいくつか行われているが、知識注入型の授業パターンに陥りがちである。

その原因は次の4点である。

- ① 「言語技術」そのものの指導法の理解が不十分であること。
- ② 学びの手段としての「言語技術」が、教科学力を身に付けさせる上でどう効果的に働くのかが曖昧であること。
- ③ 「言語技術」を活用した「ことばの力」をどのような観点や規準で評価するかが不明確であること。
- ④ 授業改善の意欲そのものを持ち得ていないこと。

これらの課題に対して、次のことについて、今後も継続的に取り組んでいきたい。

- ① 年度末のシラバス作成に当たり、各教科・科目における、「問答ゲーム」・「説明」・「分析」等の「言語技術」指導の一般化を図るための協議をさらに重ねて、評価の観点や評価規準を具体化する。
- ② 「言語技術」指導に係る教職員研修及び各教科の公開・研究授業を定期的に開催する。
- ③ 指導と評価の一体化をはかるために、評価問題の工夫・改善を行う。
- ④ 授業改善に向けて教職員研修を行い、教職員それぞれが改善の手だてを具体化する。